

大阪市立
美術館

(大阪市天王寺区)

みゅ〜
ザ・見遊じあむ

11



歴史を感じさせる外観

天王寺公園に隣接した小高い茶臼山にあるのが大阪市立美術館。1921年(大正10)に大阪市が、当時の住友家の本邸があった茶臼山邸敷地の寄付を受けて建設したのが現在の美術館の建物でした。1936年(昭和11)5月に完成し、年間を通して古美術の常設展示、美術団体への貸し会場、さらに、美術研究所も併設されています。コレクションは、現在、総数7700件に及んでいます。戦前の一時期には、高射砲第三師団の司令部も置かれました。

本の柱がコレクションの中心をなしています。これらのほか、エジプトのコプト美術やイタリアのエトルリア美術などの今日ではなかなか得がたいコレクションもあります。美術団体を複数並行して行える地下展覧会室(4室)が近年増築されました。また併設されている美術研究所では素描、絵画、彫塑の実技研究を行っており、ここから日本画、洋画、現代美術、建築など多くの作家を輩出してきた歴史があります。

ミュージアムメモ

▶所在地/大阪市天王寺区茶臼山町1-82▶開館時間/午前9時30分~午後5時▶休館日/月曜日・年末年始▶入館料・特別展/一般・1500円、高大生・1100円、中学生以下無料▶交通/JR、地下鉄谷町線・御堂筋線天王寺駅、近鉄南大阪線あべの橋下車▶問い合わせ/06-6771-4874

「釣りバカ日誌17-あとは能登なれハマとなれ」



日本の夏の映画といえば、いまや「釣りバカ」シリーズです。そのシリーズも、はや17作目。ハマちゃんこと、浜崎伝助の在籍する鈴木建設の営業三課に、ひとりの女性が再雇用の契約社員として配属されます。かつては正社員で社長秘書もつとめた才色兼備のマドンナでした。結婚退職したはずが夫のDVで離婚したのでした。ハマちゃんが彼女から相談をもちかけられたことから、高校の美術教師、釣り船のオヤジのハチまでがからんで一騒動に発展します。

今回の舞台は石川県・金沢と能登半島。とくに能登半島一帯は、いたるところに手つかずの自然が残っています。輪島の漆器、朝市、夜祭など、素朴で人情味あふれる土地柄を訪れる人をなごませてくれます。こうした風物がスクリーンにいっぱいただよいます。

いつもの常連メンバーのほかに、石田ゆり子、片岡鶴太郎、松原智恵子、宮崎美子、など多彩な顔ぶれです。しかし、ハマちゃんの西田敏行さんが59歳、スーさんこと三國連太郎さんがもう83歳だとは信じられません。監督はシリーズ4連続となった朝原雄三監督です。ちょっと残念なのは、いつものハマちゃんの宴会芸がなかったこと。ぜひ復活を。

日本の夏の
定番映画
はコレ!

高射砲台座跡
(大阪市東淀川区)

大阪の
戦跡を歩く

第10歩

八角形の
砲台跡が
今も住居に使用



コンクリートの台座が
残る住宅

大阪市東淀川区西淡路5丁目、市営国次霊園の北側でマンションや民家に囲まれた一角に、八角形の巨大なコンクリートの屋根のようなものが2カ所あります。ここも現在は住宅のようになっていますが、実は戦前には高射砲の砲台でした。近くにあった柴島浄水場や延原兵器工場を守るために1935年

(昭和10)に砲台と弾薬庫が作られ、10人ほどの兵隊が常駐していたといわれています。

戦後は、外地から帰ってきた引揚者が住居として使用していたのをはじめ、現在も何世帯かが住居にしています。その頑丈さは阪神大震災にも壊れませんでした。

木村重成と大阪夏の陣

撰津
河内
和泉
おおさか
三國誌
11
(八尾市・東大阪市)

安土桃山時代から江戸時代にかけての武将だった木村重成は、豊臣秀頼の重臣で、長門守を名乗っていました。豊臣氏が滅んだ1615年5月(現在の暦では6月初旬)の「大阪夏の陣」。木村重成はそのとき21歳。若江城があった現在の東大阪市、八尾市の玉串川あたりで徳川軍と合戦。奮戦しましたが戦死。すでに出陣から覚悟を決めていた重成は、兜の中に香を焚いて、討ちとられても見苦しくないようにしていた話がよく知られています。

重成の150回忌の年、重成を討った安藤長三郎の子孫が、供養のために建てた墓が、八尾



東大阪市若江南町にある木村重成の石像

市幸町の通称「木村公園」に残っています。10畳ほどの台座のある立派な造りです。毎年、6月5日の命日には地元の人々の手で今も供養が行われています。

このほか、重成に関連する史跡では、東大阪市中小阪の弥栄神社には、重成が馬をとめて炎上する大阪城を眺めたという「馬立ち」跡、同若江南町には重成の石像、蓮城寺には重成の肖像画をおさめた礼拝所、若江城跡、大阪北区の中央公会堂の近くに大きな重成の顕彰碑が建っています。

『雨ニモマケズ』
宮沢 賢治

「雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ 欲ハナク 決シテイカラズ イツモシズカニワラツテイル 一日ニ玄米四合ト、味噌ト少シノ野菜ヲタベ アラユルコトヲ 自分ヲカンジョウニ入レズニ ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ (以下省略)」1931年(昭和6)、教科書にもよくでてくるこの詩は、宮沢賢治が37歳で亡くなる2年前に病床で手帳に書きました。

いまも心に響く
名詩・名歌・名語録

『男はつらいよ』
車 寅次郎

「わたくし、生まれも育ちも葛飾柴又です。帝釈天で産湯をつかい、姓は車、名は寅次郎、人呼んでフーテンの寅と発します」このさわやかな口調とテーマソングで多くの人々を楽しませてくれたのが映画『男はつらいよ』。シリーズ48作が製作され、ギネスブックに掲載されました。フーテンの寅を演じた渥美清は1996年8月4日に永眠。享年68歳。死後に国民栄誉賞が贈られました。今年の夏は没後10年で、さまざまな記念の行事や催しが行われています。